

補完代替 CHOP 療法で完全寛解した猫の消化器型リンパ腫の 1 例

○大池三千男¹⁾

1) おおいけ動物病院

【はじめに】演者は、本学会において以下の症例報告を実施してきた。

2011 年（平成 23 年）「高濃度ビタミン C 点滴療法の犬への応用症例」（13 症例）

2019 年（令和元年）「ホモトキシコロジーで治療した犬の口唇の上皮向性皮膚型リンパ腫の 1 例」

2021 年（令和 3 年）「ホモトキシコロジーで治療した骨髄異形性症候群から急性骨髄性白血病へ進行した犬の 1 例」

2022 年（令和 4 年）「オゾン療法により QOL の改善がみられた犬の心基底部腫瘍の 1 例」

今回、猫の消化器型リンパ腫の症例に、ビタミン C(C)、ホモトキシコロジー(H)、オゾン療法(O)を併用した「補完代替 CHO 療法」に、プレドニゾロン(P)を加えた「補完代替 CHOP 療法」を実施して、完全寛解を得たので報告する。

【症例】雑種猫、雌、避妊済み、5 歳齢、体重 4.48 kg。元気消失、嘔吐、食欲不振で来院した。食餌は市販のドライフードを給餌していた。第 1 病日に腹部腫瘤を触知した。レントゲン検査とエコー検査で腹部腫瘤（7.8×3.5 cm）を確認し、FNA を実施して、猫の消化器型リンパ腫（大細胞性）と診断した。飼主は抗がん剤治療を望まなかったため、「補完代替 CHO 療法」を開始した。酢酸リンゲル 100 ml を皮下輸液した部位に、(C) ビタミン C 2 g とビタミン B 群（シーパラ）、グルタチオン 500 mg を混合し、皮下注射した。(H) ホモトキシコロジーは、Coenzyme compositum 1 ml と Ubichinon compositum 1 ml を 1 週毎に、ParaBenzochinon-Injeel 1 ml と Glyoxal compositum 1 ml は交互に 1 週毎に皮下注射した。また、Lymphomyosot（1 T sid）を経口投与した。(O) オゾン療法は、注腸法 15 μg/dl、20 ml を 1 週間毎に実施した。第 14 病日になっても、腫瘤の大きさに変化なく、食欲と元気もないため、第 16 病日から (P) プレドニゾロン（5 mg、bid～sid～eod）を加え「補完代替 CHOP 療法」とした。オルビフロキサシン（23 日間）も併用した。第 42 病日には腹部腫瘤は消失し、完全寛解した。その後の治療は約 1～2 週間毎に継続し、プレドニゾロンは漸減し、第 497 病日に中止し、第 792 病日に全ての治療を終了した。6 年以上経過した現在も 11 歳生存中である。

【考察】猫の消化器型リンパ腫は、プレドニゾロン単独では、寛解は望めない疾患である。今回、予め「補完代替 CHO 療法」で導入し、後からプレドニゾロン（P）を加えて「補完代替 CHOP 療法」としたことが、他剤（CHO）との相乗効果で、リンパ系腫瘍に対するプレドニゾロン（P）の効果を高め、完全寛解に至ったと考えている。